目次

● 巻頭言
  学者・言徳・文士………………………………研究科長・学部長 竹内 洋 …… 2

● 在外研究ノート
  北京便り …………………………………教育学講座 辻本雅史 …………… 3

● 研究ノート
  教官から …………………………………教育認知心理学講座 子安増生 …………… 4
  院生から …………………………………教育方法学講座 岩崎紀子 …………… 4

● 事務室から
  事務室の現状と展望 ………………………事務長 勝見 治 …………… 5

● 図書室から
  教育学部図書室の今日・明日 ………………………図書館長 木村祥子 …………… 5

● 臨床教育実践センターから ………………センター長 東山紘久 …………… 6

● 心理相談室から …………………………相談主任 岡田康伸 …………… 6

● 諸記録 ……………………………………………………………………………………………………… 7
  ① 入試結果 ② 学位授与記録 ③ 教育職員免許状取得状況 ④ 人事異動
  ⑤ 招聘外国人研究者の記録 ⑥ 科学研究員補助金 ⑦ 受託研究の受入

● 諸報
  新任教官、事務官、事務補佐員紹介 …………………………………………………… 9
巻頭言

学者・官僚・文士

教育学研究科長・教育学部長 竹内 洋

「荘子」応王王篤の末尾に「混沌、七絵に死す」という寓話がある。南海の帝「極」（シュク）と北海の帝「恵」（コツ）は中央の帝の土壌でときどき会合をもった。中央の帝である

「混沌」は二人を手厚く遇した。二人は混沌の恩に報いようとして、相談した。人には目、耳、鼻、口の穴があるが、混沌にはそれがない。そこで一日にひとつつな穴をあけてやることにした。「七日にして混沌死せり」。この寓話にでてくる「ひとつつな穴をあけてやる」所作は近代社会の社会学的分析・分解する能による生きる経験の唯一性の破壊のメタファーといえ得ないだろうか。

学問は理論と概念と抽象による客観的解読であるから、混沌の身体に穴をあける作用に他ならない。しかし、穴をあけることによって、混沌は死んでしまう。ウィットゲンシュテート風にいえば、「雲」をその形態によって分類しようとする所作の総括である。人文・社会系の研究論文を読んだあとはにいますまで、曖昧だったことが整理されたり、これまでとちがった意味の層が発見されることによって、実践的解読の不明瞭性が消えていくことによる暗黙な構成として理解が得られることも多いので、他方でそれだけのことだったのか、なぜか大事なものを指摘してしまっているというし臭りも残る。いうばいの両義性は学問を志す多くの人がなにか経験する感情であろう。「理論は灰色で現実は緑だ」というゲーテの有名な言葉もある。

こうしてみれば理論的リアリティと実感的リアリティあるいは学間表現と実感表現ののはさまでの揺らぎは、学問を志す者にとっての運命なのだ。揺らぎあうと揺らぎの処理流儀によって、学者は官僚型と文士型の二類型に分けられる。官僚型学者というのは、学問の抽象化作用に対する揺らぎが少ない学者である。官僚型学者は揺らぎがないだけにきっちりまとめる能力は抜群だが、公式主義になる危険性もある。文体と語り口は乾いている。一方、文士型学者は両義性からの揺らぎが大きいから、実感にも訴えるがディレクソニズムの懸念もある。文体と語り口には湿り気が多い。

では学者の理想型は、官僚型と文士型の中間にあるのだろうか。単に中間にあるというのではないとうもう。人文・社会系の学問は感情や社会構造のひだの言表化の作用に取り組むのだから、文士型の要素は不可欠である。その意味で小説や音楽、映画（ビデオ）は嫌いかず、学問は好きというのはどこかまちがっている、とわたしたちは思う。しかし、芸術のまま、学問は文士型の感情的な感受性にうつったものを強化する教訓精神によって、概念化し、抽象化しなければならない。文士型感受性を大事にしなくても、そこからの断念と挑戦が必要である。こうして最終として官僚型と文士型の中間に宙吊り状態におかれる危うしいディレクソニズム学者からは生々しさの欠如を、官僚型学者からは生々しさの過剰を批判されない--そこから学問を目指す人の理想ポジションのようにおもわれる。マックス・ウェーバーや丸山真男はそうした範疇の学者型学者とはいえそうだ。ウェーバーは、ディレクソニズムをこののほかきらったが、ウェーバー自身が内部で巨大なディレクソニズムをかかえこんでいたからであろう。どちらも強制的な論理の人ではないが、音楽と文芸の逸話がこののほか深かった学者である。
北平便り
辻本雅史

今、私は中国の北京に来ています。国際交流基金の派遣教員として、2000年9月10日から2001年1月11日まで滞在します。ここでの私の任務は、「北京日本学研究センター」（中国での名称「北京日本学研究センター」）で、日本を研究対象にしている中国人の大学院学生に、日本の思想や文化の歴史を教えとすること、また、研究機関としての本センターの研究活動に協力することにあります。

北京日本学研究センターは、中国における日本語・日本研究、及び日本との交流に携わる人材養成を目的に、国際交流基金と中国教育部（文部省に相当）の協力による教育・研究機関です。北京外国語大学内に置かれ、いわば大学院をもつ独立研究センターです。

本センターの前身は、1980年設置の通称「太平学校」（「日本語研修センター」）。それは70年代の北平正芳首相（当時）訪中を機に設置された、中国における大学の現職日本語教師の集中研修機関でした。「日本学研究センター」はこれを母体に、新たに日本語・日本研究の専門家養成をめざした「大学院修士課程」として、85年に発足。これは文革後初めて中国に日本研究のための大学院が開設されたことを意味します。以後15年、現在は「日本語研修コース」（来年大学院化して「在職修士課程」に改組）の他に、「大学院修士・博士課程」の充実を見、言語（日本語）・文学・社会・文化の4コース制になっています。中国の学制の枠のなかで、日本の大学院に準じたカリキュラムが組まれ、その中心部分は、日本から派遣された教官スタッフ（10人前後）が担当しています。修士修了137名、日本語研修生285名にのぼっています（2000年4月現在、「太平学校」を除く）。

大学院の文化コースが私の担当です。学生は修士1学年全体定員20人、文化コースには1年が4人、2年が5人います。この合計9人の学制を私ともう一人の日本人教員の2人で研究指導しています。

学生は例外なく完璧な日本語を使います。それには驚かされます。彼らの日本語は、ある意味で（文法や敬語法など）その京大生より「正確」です。逆に言えば日本語に堪能なわけではないことはないのです。（入試はとても難関です。）センター内は、中国側事務スタッフを残して、全ての日本語の空間。そのため学生は結果的に外国語学部の日本語専攻出身者で占められます。実はそこに大きな問題もあるのです。

というのでは、中国の外国語教育は、学問的（外国文献を読む）手段としての外国語教育ではなく、実用的な学問に倣っています。学部4年で語学をほぼマスターし、会話できる反面、学問的な訓練はなされていないのです。与えられた課題は事前にこうした反面、自分で問題を見いだし、学問的にそれを解く思考や方法が失われて、という状態です。日本に関する知識も、入試のための文献検索の日本国史の教科書の枠を出しています。いわば京大の学部1生と想定して大きくなれればなりません。

彼らは例外なく真面目で、まるで砂礫が水を吸収するごとく、教えることを吸収するのです。京大生と大違い。2年半（平均1年半）の訪日研究を含む）で完成させる修士論文の多くは、京大でも通総柔軟です。私も京大で2人の訪日研究を受けて入ました。

卒業後、多数は中国の大学教師として職を得ますが、とくに選ばれた4人（4年間）が、さらに国費留学生として日本の大学の博士課程に進学し、学位をめざします。こうして育った日本研究者が、今の中国の日本研究の中堅を担うようになっています。

私がとくに考慮することは、「外国学としての日本研究」のあり方です。日本研究をめざす中国人学生への指導が、京大での大学院生指導と同じであってよいはずです。それは私のこれまでの日本研究を外からの観点から見直しように思っています。この点を、中国の21世紀の日本研究を担う若き学徒と共に今考えているところです。

以上、北京日本学研究センターの一端の報告にとどまりましたのが、ここで得た刺激を京大での研究・教育に生かすのが私の今後の課題となります。

(2000年10月3日記)

【附記】
本センターは、今秋開設15周年を迎え、9月29-30日、中国内外の研究者を招いて記念講演会とシンポジウム、研究発表会を盛大に行いました。参加する記念講演は作家の大江健三郎氏、シンポジウムは「21世紀日本学研究の方法〜外部からの視点」のテーマで、中国の他、日本、韓国、アメリカから著名な研究者を招いて計画、翌日に開催の研究発表会で47人が活発に行われました。東アジアの日本学研究のセンターになりつつあると願えましょう。
研究ノート

教育認知心理学講座教授
子安 増生

私が今一番関心を持って研究していることは、幼児期の認知発達である。
人工知能研究の泰斗、マサチューセッツ工科大学のマンウィン・ミンスキー教授は、今後の人工知能研究の目標として、「5歳の子どもたちのことを機械ができるようにしたい」と語ったという（「日本経済新聞」2000年7月31日付）。「5歳の子どもたち」という目標は、一見低いように見えるかもしれないが、実は決してそんなことではない。

言語発達に関して言えば、5歳までは外国語を開き取り、話す能力の習得が容易でないことは、多くの人が痛感することだろう。また、楽器の演奏、囲碁・将棋などの領域で、大人が5歳児にかなわないことは決してまれではない。また、5歳児は、問題を示されて「これができると思う？」と聞かれるとき、やる前から「できる」「できない」を言うことができる。機械は、計算の前にその計算自体が可能かどうかを示せない。

「心の理解」もまた、5歳の子どもが獲得可能な能力である。大人は、幼稚園児のことを赤ちゃんのように思いがちだが、5歳児は、大人と同じように、仲間に対してコンプレックス（優越感や劣等感）を持ったり、気に入らない相手には事態を悪化させるため、気味の悪いときに沈黙し反省され別れる機会に飛び出したりなど、多様で豊かな心の世界が生きていている。私たちは、異年齢の幼児が集う絵画教室の幼稚園の子どもたちを3年間わたって毎週1回観察する継続の発達研究をこれまで、そのような事実を示した（子安・服部・歌詞著「子どもが心に出会うとき」、有斐閣、2000年）。間違いない、「心の教育の原点は幼児期以前にあると言えよう。

（これやすますね）

教育方法学講座D2
岩崎 紀子

子どもたちは、科学的概念について教科書で多くの「学び」を経験しています。彼らの「学び」は理科の授業で科学的概念と対面したときに発現します。たとえば、「紙は燃えると変わるから、鉄も燃えると変わるんだね」といった具合に。

子どもから飛び出すようになった「素朴概念」は、子どもらしい固有の論理をもって構成され、ときには大人の予想を超えるような意味付けがなされています。一見、間違っていると思われるものでも、子どもはそこにある種の「一貫性」を保持しようとし、眼前で起こる自然事象に対して、既往経験や既習事項を巧みに活用しながら解析し、自分なりにその理論を説明しようとしているのです。

（子どもの「学び」と教師の「教え」の間にプレはないだろうか。これがあ私の研究の出発点である問題意識です。授業という「ミクロスモンス」で、子どもたちはそれぞれに多様な「学び」を経験しています。彼ら自身がその「学び」をどう組織し、意味付けているのか、つまり、彼らが授業という「大きな物語」のなかで自らの「物語り」をどう生きているのか、それを理科教育という窓口からのぞいてみたい、というのが私の研究のスタンスです。

現在の研究テーマは、明治末期～大正期にかけての理科の授業において、子どもたちが実験を通じて何を学んでいたのかを、教師の授業法との関係から捉えるというものです。日本での「生徒実験」論の実践化に尽力した橋本源太郎（1869-1961）の教授論をもとにして、歴史研究を通じて、理科の授業における子どもたちの「学び」の実相をとらえたいと考えています。また、教師が子どもの「学び」の実相を反省的にとらえながら、自らの授業実践をどう構成していこうとしているのかを、歴史的に、そして現在の教育現場からさくらうというのも研究課題の一つです。

子どもと教師によって織り成される「ドラマ」としての「授業で、どのような物語りが生成しているのか、その過程を歴史的に現代的に、理論的に実践的に研究することができる場、それが我が教育方法学講座です。
事務室の現状と展望

今般、ニュースレターの創刊に当たって、教育学部事務室が抱えている現状と将来の展望について、ご理解を得て紙面を拝借し簡単に述べたいと思います。

ご承知のように、私たち事務職員は一般に教育・研究支援職員と位置付けられ、学部という教育・研究の実践の場において、その遂行に必要な事務処理を行っています。例えば、教務事務、図書・情報サービス、学内外の教育・研究機関との連絡調整、研究費申請や研究費の管理業務等があり、日頃から教員が教育・研究を行い易く、学生が学び易い環境作りに努めています。

現在、教育学部の事務室は庶務、会計、教務及び図書の4部と全学の教育業務を担当する専門職員で構成されています。事務室としては他の学部に比して小規模ながら、事務量は決して少なくありません。経常的に時間外勤務を余儀なくされている現状です。

昨今は、独立行政法人化問題や大学改革の推進など、国大学を取り巻く環境は極めて厳しいものがありますが、中でも事務職員に身近に感じることの多い定員削減問題があります。これは、今回の全国行政機関の定員を少なくとも10%削減するとともに、独立行政法人化等により国家公務員数を25%削減しようとするものです。定員削減は既に2期にわたって実施されており、現状では今後の削減にはとても耐えがたく、抜本的な見直しが喫緊の課題となっています。

従来からも全学体制で事務の簡素化や合理化を進めていますが、お引き続きその進捗が不可欠であり、また、個々の学部においても思い切った事務の省却や積極的な情報技術（ＩＴ）の活用等による改善合理化を図る必要に迫られています。

その上、教務局による事務室統合の問題があります。今後は、従来の一部局専用事務組織の維持は困難であり、従って、原則として、部局共用型事務組織への改編を進めるという学内の基本姿勢が示されています。この方針を受けて文系学部の事務室統合案を検討しています。これは教務・研究に対するサービス低下に背中合わせの一面を含むため、慎重な検討が必要であると、他方では構成員のご理解とご協力が必要です。まだ暗黒時代の状況ですが、いずれ具体的案をお示しすることになります。それ以前に、このことについて忌諱のないご意見をお聞かせいただければ幸いです。よろしくお願いします。

事務長
勝見治

教育学部図書室の今日・明日

ご承知のように、教育学部図書室は蔵書約133,000冊、閲覧席12席の小さい図書室です。定員2名、非常勤職員4名で図書業務が行われています。図書室は座席数も少なく、利用者のために新しい設備を導入したくても設備するスペースのないのが現状です。図書係職員は各部署で一生懸命に頑張っていますが、現状では以上のようなサービスをやってゆくには限界の状況です。

しかし、図書室は教員・学生達が利用する公共の場であり、清潔で明るい学園気の中で勉学が風呂風呂ができ、利用しやすい環境を作ってゆくよう配慮するとともに、私達も気持よく仕事ができる場所にしてゆきたいと思います。利用者の皆さんも図書室の環境、業務のうえで改善することがありましたらご遠慮なくお申し出ください。検討のうえでできることはやってゆきたいです。

さて、図書館が当面している課題として、①改築化した書庫スペース ②未入力図書資料の追及入力 ③貸出・返却システムの導入 ④事務部門の統合化、等々にどう対応するかという問題があ


図書館長
木村祥子

④の課題については、現在文系学部の事務部門の統合化が（学部図書室の統合化も含む）検討されています。実施に至るまでには多くの問題が山積するが、大学の将来を見据えると避けられない社会状況があります。現在の状況では現在の業務をそのまま遂行するだけでも一等棒です。利用者へより充実したサービスの提供をめざし、時代の要求に見合ったサービスの拡充をするために必要な検討課題だと思います。

今後、この「図書室から」のコーナーを利用して、図書室だけでなく周辺の情報もお知らせしたいと考えています。よろしくお願いいたします。

（平成12年9月25日）
心理教育相談室は、古くからある、学外に向かっての、市民のための、ここらの問題を相談者（クライエント）と心理治療者（セラピスト）とが一緒に関連解決に向けて考えていく場所である。この相談室は、院生の自発的な発想と努力から教育心理学教室の研究の一環として発足していったと聞いています。今では、文部省が認める、有料の心理相談室である。

臨床心理学系の大学院生はこの相談室で実践の場として、心理療法に携わり、研究のテーマを深めている。以前は、教育学部の横のネレンガに面接室があり、ちょっと庭の距離にあったが、今は、文学部棟の地下にある。この距離は、少し離れたけど、不適で、実践と研究がはらばらになった感じで、一刻も早く、同じ建物の中に、研究室も、相談室もあるようになることを望みたい。

文学部棟に移ったことにより、面接室は少々増えたが、院生の増加には追いつけず、部屋不足に困っている。院生が面接するので、カンファレンスなどの授業がある時は、員数をまきに出すので、面接室は全く空きである。これは大学の相談室の宿命であろう。このような、条件にもかかわらず、年間延べ4000人以上の面接をこなしている。有料であり、2970円が平均の収入すると、大蔵省に1200万円以上は相談室から収めていることになる。相談件数も増えており、需要はまだままだので、相談室の増設など、設備をもっと充実してもらいたい。

京大の心理教育相談室は日本の心理臨床に新しいことを発信し続けており、日本の大学の心理相談をリードしているだけでなく、日本の心理臨床をリードし続けて、心理臨床学の構築に向けて、努力し続けている。

クライエントの相談は多彩であり、また、その年齢層も子供から老人までいる。クライエントとの関係で相談の内容や相談室の活動を詳しく報告できないので、誤解を受けていることもあるかもしれないが、それにしても、相談室の活動はきわめて重要である。
### 平成12年度入試結果

<table>
<thead>
<tr>
<th>日程等</th>
<th>募集人員</th>
<th>志願者数</th>
<th>受験者数</th>
<th>合格者数</th>
<th>入学者数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>前期日程</td>
<td>40</td>
<td>165</td>
<td>159</td>
<td>42</td>
<td>63</td>
</tr>
<tr>
<td>後期日程</td>
<td>20</td>
<td>168</td>
<td>91</td>
<td>21</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>第3年次編入学</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 平成11年度学位授与件数

<table>
<thead>
<tr>
<th>学位名等</th>
<th>授与者数</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>学士</td>
<td>教育学科</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教育心理学</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教育社会学科</td>
</tr>
<tr>
<td>修士</td>
<td>教育科学専攻</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>臨床教育学専攻</td>
</tr>
<tr>
<td></td>
<td>教育方法学専攻</td>
</tr>
<tr>
<td>博士</td>
<td>論文博士</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 教育職員免許状取得状況

#### 平成7年度（1995）
- 中学校教員免許状
- 高等学校教員免許状
- 教師認定免許状

#### 平成8年度（1996）
- 中学校教員免許状
- 高等学校教員免許状
- 教師認定免許状

#### 平成9年度（1997）
- 中学校教員免許状
- 高等学校教員免許状
- 教師認定免許状

#### 平成10年度（1998）
- 中学校教員免許状
- 高等学校教員免許状
- 教師認定免許状

#### 平成11年度（1999）
- 中学校教員免許状
- 高等学校教員免許状
- 教師認定免許状
### 科学研究費補助金

#### 平成12年度

<table>
<thead>
<tr>
<th>研究種目</th>
<th>研究題目</th>
<th>氏名</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>基盤研究(B1)</td>
<td>大衆教育時代におけるエリート中等学校の学校文化と人間形成に関する比較研究</td>
<td>竹内 洋</td>
</tr>
<tr>
<td>基盤研究(B2)</td>
<td>難発の思考における再構成とアカデミックの機能の認知心理学的研究</td>
<td>騰平 壽宏</td>
</tr>
<tr>
<td>基盤研究(B2)</td>
<td>パスカル病患者の人格構造に関する研究</td>
<td>子安 増生</td>
</tr>
<tr>
<td>特定領域研究(A1)</td>
<td>設計用コラムマガジンの設計の研究</td>
<td>山中 肆裕</td>
</tr>
<tr>
<td>特定領域研究(A1)</td>
<td>心理臨床教育におけるスーパーヴィジョンの方法と成果に関する多角的検討</td>
<td>東山 級久</td>
</tr>
<tr>
<td>基盤研究(C4)</td>
<td>公教育の宗教的収集性および共通シスバースに関する国際比較研究</td>
<td>萩原 武</td>
</tr>
<tr>
<td>基盤研究(C4)</td>
<td>教育における「共創性」に関する人間形成の経営研究——現代社会における教育責任の意思基盤を求めて——</td>
<td>今井 紀夫</td>
</tr>
<tr>
<td>基盤研究(C2)</td>
<td>難民地支配下台湾・朝鮮におけ るイギリス・アメリカ・カナダ長老教会の伝道と教育</td>
<td>護部 武</td>
</tr>
<tr>
<td>基盤研究(C2)</td>
<td>認知科学の実験と測定に関する個人差及びメタ認知的知識の利用に関する実験的研究</td>
<td>吉川左記子</td>
</tr>
<tr>
<td>基盤研究(C2)</td>
<td>現代日仏青年の生涯指導の生涯発展心理学的研</td>
<td>山田 洋子</td>
</tr>
<tr>
<td>基盤研究(C2)</td>
<td>日中関係における小学生的数学思考の発達に関する比較研究</td>
<td>田中 英治</td>
</tr>
<tr>
<td>基盤研究(C2)</td>
<td>「教育運営機能」強化に基づく教育政策の役割と課題に関する研究</td>
<td>高見 茂</td>
</tr>
</tbody>
</table>

### 受託研究の受入

<table>
<thead>
<tr>
<th>受託研究題目</th>
<th>研究委託者</th>
<th>研究担当者</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>ネットワーク環境での言語教育における教育効率測定に関する研究</td>
<td>株式会社</td>
<td>教育認知心理学講座 佐々佐藤教授</td>
</tr>
<tr>
<td>ネットワーク環境での言語教育における教育効率測定に関する研究</td>
<td>株式会社</td>
<td>教育認知心理学講座 佐々佐藤教授</td>
</tr>
<tr>
<td>日中関係における小学生的数学思考の発達に関する比較研究</td>
<td>田中 英治</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>对面コミュニケーションにおける視覚情報の効果とその影響</td>
<td>財団法人</td>
<td>教育認知心理学講座 佐々佐藤教授</td>
</tr>
</tbody>
</table>

---
新任教官・事務官・事務補佐員紹介（「」内は本人の抱負）
編集後記

わが教育学研究科・教育学部「ニュースレター」発行の運びとなりました。文科系4学部では初めての脳みだということもあり、竹内研究科長・学部長の意気込みは、々々ならぬものがありました。何とか発行にまで道行きつけることができましたのは、お忙しい中、原稿の執筆を快くお引き受けくださった諸先生方ならびに職員の方々のご協力と、編集の任に当たって頂きました広報委員会委員各位のご尽力の賜物でございます。心から感謝致しますとともに厚くお礼申し上げます。

何分懲りぬ企画・編集作業ゆえ、まだまだ不十分な点が多々あろうかと思いますが、より内容の充実した「ニュースレター」にして参りたいと考えております。どうか読者の皆様方の暖かいご支援を賜りますようお願い申し上げます。

次号は来年5月発行の予定でございます。何かお気付きの点、ご意見がございましたら、広報委員会宛にご連絡ください。

（S. T. 記）

京都大学教育学研究科
・教育学部広報委員会（平成12年7月）

委員長 森見 茂 助教授
（比較教育政策学講座）

委 員 竹内 洋 教授
（教育学研究科長・学部長）

委 員 田中 稔治 助教授
（教育方法学講座）

委 員 桃見 孝 助教授
（認知心理学講座）

委 員 藤見 治 事務長
委 員 山根 大和 事務担当

事務担当
教育学研究科・教育学部広報掛
TEL 075(753)3003

表紙デザイン  山田 司子